

【月刊】キリスト教書評誌

本のひろば

February
2023 2

ISSN 0286-7001

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2023年2月1日発行（毎月一回1日発行）第782号

● 出会い・本・人

ウクライナとロシアと共に祈る 高橋沙奈美

● 特集 グノーシスを学ぶなら

この三冊！ 土井健司

● 本・批評と紹介

近藤勝彦著 キリスト教教義学 下 井ノ川勝

R・ニーバー著／高橋義文、柳田洋夫訳 悲劇を越えて 安酸敏真

アレクサンドリアのクレメンヌス著／秋山 学訳

キリスト教教父著作集5 小高 毅

チャールズ・フォスター著／伊藤 悟訳

世代から世代へ 岡村直樹

飯島 信編著 いのちの言葉を交わすとき 小暮修也

岩本遠億著 聖霊の上昇気流 藤本 満

吉岡容子著

少女の命・女性の命、嵐の中から新たな命 深澤 奨

原口尚彰著 アガペーとフィリア 辻 学

兩宮栄一著 反ナチ抵抗運動とモルトケ伯 小海 基

英国ナザレン神学校著／大頭眞一と焚き火を囲む仲間たち 訳

聖化の再発見 上・旧約 下・新約 原田彰久（再掲載）

既刊案内

書店案内

1万人の孤児を
救った「祈りの人」の
真の姿に迫る

ジョージ・ミユラーと
キリスト教社会福祉の源泉
天助の思想と日本への影響
木原活信 著

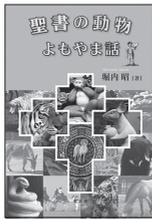


ジョージ・ミユラーとキリスト教社会福祉の源泉

「天助」の思想と日本への影響

19世紀イギリスで伝道と孤児事業に献身し、キリスト教社会福祉の先駆者となったジョージ・ミユラー。その生涯と功績を明らかにしつつ、思想の形成過程を分析し、山室軍平や石井十次ら日本の社会福祉史への影響を探る。

● A5判・上製・300頁・定価5,060円



聖書の動物よもやま話

堀内 昭 著

聖書に出てくる動物は、仏教・神道、古典文学ではどのような存在として登場するのか。人間の暮らしと動物たちの関わりを、科学者の視点で紹介する楽しいエッセイ。

● A5判・並製・262頁十口絵8頁・定価2,200円



なぜ子どもは神を信じるのか?

人間の宗教性の心理学的研究

J・L・バレット 著 松島公望 監訳

矢吹理恵 / 荒川 歩 編訳

神への信念は果たして「教え込み」によるのか? 親が無神論者でも、子どもが熱心に神を信じるのはなぜか? 超自然的存在を信じることは、心理学から見て合理的なののか? 宗教が人生に与える影響を示し、「信じる」との価値を問い直す、最新の研究。

● A5判・並製・270頁・定価2,970円

コンパクト聖書注解 コリント人への第一の手紙Ⅲ

H・W・ホーランド 著 池永倫明 訳

完全なる信仰・希望・愛



聖霊の賜物に優劣はあるのか? 死者の復活はあるのか? あらゆる賜物や知識を超えた真の「愛」とは? パウロがコリント教会に語った、愛に基づき他者を建て上げるキリスト者のあり方を紐解く堅実な注解書。最終部の12-16章を収録した第三巻。

● 四八判・並製・282頁・定価4,070円

「コンパクト聖書注解」シリーズ、既刊好評発売中!

コリント人への第一の手紙Ⅰ

H・W・ホーランド 著 池永倫明 訳

● 四八判・並製・276頁・定価3,850円

コリント人への第一の手紙Ⅱ

H・W・ホーランド 著 池永倫明 訳

● 四八判・並製・192頁・定価3,080円





ウクライナとロシアと共に祈る

高橋沙奈美

戦争は不条理の塊である。ウクライナでも、ロシアでも悲しみと怒りが渦巻いている。戦争の被害者に罪はない。彼らの多くが「なぜ私たちが」と考え、その怒りのすべてをロシアにぶつけようとしている。ウクライナが、大国ロシアに決して屈しないのはこの怒りがあるからだ。私たちには、この怒りをなだめることはできない。

一方で、ロシアでの生活を自分の一部としてきた私は、その攻撃の根本にあるものが、大国主義的な利益関心のみによるものではなく、むしろ「なぜ私たちが」という怒りであることを知っている。なぜ私たちの価値観は蔑まれるのか、なぜ私たちがいつも悪者にされるのか。これもまた、答えを求めないで、怒りであり、私たちはこれをなだめることも、その言い分を認めることもできない。

悲しみと怒りをぶつけ合い、力によって正義を証しようとする限りに於いて、平安は訪れない。終わりの見えない戦争の

現実を目の前に、私たちが祈ることは、何の役に立つのか？

アウシュヴィッツを経験した同胞と共にあり、ひとり息子を失ったラビであるH・S・クシュナーの神は、「不運や病気や残虐が存在する世界を創り、それらがあなたをおそうのを防ぐことができない」不完全な存在である。しかしそうした神を赦し愛す時、神は虐げられた者と共にあり、私たちを孤独にせず、生き続ける力と希望と勇気を与えてくれる存在となる。あまりにも有名な『現代のヨブ記』を、今ふたたび、なるべく多くの人々と共に読みたい。

「神よ、戦争を終結させたまえとは祈りません／自分と隣人のなかに／平和への道筋をみずから見いだすべしと／神がこの世を創られたことを知っているのですから／：／ですから神よ／ただ祈るのではなく／力と決断と意志をのみ／われらは祈り求めるのです」

(たかはし・さなみ 九州大学人間環境学研究院講師)



グノーシスを学ぶなら

▼ハンスの三冊！

土井健司

(どい・けんじ・関西学院大学神学部教授)

グノーシスという言葉の響きにはどこか惹かれるものがある。異国情緒に満ちていて、尋常でない深淵な知恵といるところであろうか。しかし、その歴史の実態を捉えるのはまったく容易ではない。関連書は日本語のものでも数多くあり、三冊に限定するのがむずかしいが、バランスを考えつつ選んでみた。

ハンス・ヨナス著『グノーシスの宗教
【増補版】』秋山さと子／入江良平訳、

九三三年に完成したという。しかしユダヤ人のヨナスにとってもはやドイツで教授資格論文を提出するどころでなく、彼はイギリスに亡命する。さらにその後テーマを古代末期の精神状況からグノーシス主義に特化し、また一般向けに書き改めて、この『グノーシスの宗教』を公刊した(一九五七年)。その第二部「グノーシスの諸体系」では資料をもとに、シモン・マゲス、『真珠の歌』、マルキオン、ヴァレンティノス派といった個々の事象に立ち入って論じるが、とくに魅力的であるのは第一部であろう。そこでは「グノーシス」と呼ばれる諸派に見られる世界に向かった根本体勢の特徴が論じられている。「グノーシスのイメージ」とその象徴言語」と題された第三章は、「異邦のもの」、「彼方」、「外」、「この世」、「他の世界」、「光と闇」、「転落」、「沈下」、「捕囚」などのグノーシス文

人文書院、二〇二〇年。

「われわれの紀元の初めの頃の霧のなかに神話的形象の壮麗な行列がおぼろな姿を見せている。これらの形象の巨大で超人的な像——それがもうひとつのシステイナ大聖堂の壁と天井を埋めたとしても見劣りはしないだろう。彼らの行為と所作、彼らに割り当てられた役割、彼らの演ずるドラマのあたえるイメージは、われわれ観客の想像力を培ってきた聖書のドラマとは異なっている。だからそこには不思議な懐

書に頻出するというイメージについて論じている。ナグ・ハマディ文書がほとんど取り上げられていないなどの資料面での欠点はあるものの、ヨナスの本は「グノーシス」の思想・イメージ分析の点で今日でも光彩を放ち、魅力に満ちている。随分以前に邦訳が出版されているが、「第三版への序文」を加えた増補版が最近出た。

荒井献・大貫隆・小林稔・筒井賢治編
訳『新約聖書外典 ナグ・ハマディ文書抄』、岩波文庫、二〇二二年。

二十世紀は考古学上の発見が相次いだ時代であったが、「死海写本」(一九四七年)と並んで、一九四五五年の「ナグ・ハマディ文書」の発見は一世を風靡し、初期キリスト教の研究に拍車をかけたといえる。邦訳は荒井献を中心とするチームが精力的に取り組み、岩波書店から四巻本の『ナグ・ハマディ

かしさがあり、妙に心をかき乱すものであるだろう。」

この魅力的な書き出しは、ハンス・ヨナスの『グノーシスの宗教』の序文の冒頭である。グノーシスという言葉の醸し出す魅力を見事に表現している。ヨナスは一九二〇年代に大学で哲学を学んでおり、ルドルフ・ブルトマンのゼミに出席することでヨハネ福音書における「神を知ること」をテーマに発表し、ライツェンシュタインの影響も合わせて、グノーシス研究に入り込んで行った。その動機はギリシア哲学をはじめとする二世紀、三世紀の古代の精神世界のなかで「認識」(グノーシス)が何を意味するのかを究明したいというものであったという。こうして学位論文『グノーシスの概念』が仕上がりがり、そののちに二世紀の神話的グノーシスの研究を深めて『グノーシスと古代末期の精神』第一部の原稿を一

文書I—IV」として公刊されていた。今年になって岩波文庫として出された『新約聖書外典 ナグ・ハマディ文書抄』は新約聖書外典に数えられるものを選び出し、また二世紀になって公にされた『ユダの福音書』を含めて編まれている。なお翻訳や解説は基本的に再録となっている。

正統派教会から不当に弾圧されて異端派とされたグループが秘かに伝えた真実、これらグノーシス関連文書に対する世間による当初の期待であったのかもしれない。「封印された真実」などのキャッチについても見たような覚えがある。しかし実際は、こうした単純な図式で括えることは夢物語にすぎず、一つひとつ気の遠くなるような文献研究が必要となる。外典文書、つまり福音書、行伝、黙示録といったタイトルをもつ古代の諸文書の多様性は一筋縄ではいかない。



『グノーシスの宗教
【増補版】』
ハンス・ヨナス：著
秋山さと子、入江良平：訳
人文書院
2020年
A5判 486頁
5,280円

入
五、自らの領域から墜落した神的要素がある階級の人間の内部で神的火花として眠っており、解放されるといふ神話的ドラマにより現状を説明すること六、この現状は上位から降り、そして上昇する彼岸の救済者像とおしてのみ説明できるといふ認識



岩波文庫『新約聖書外典
ナグ・ハマディ文書抄』
荒井献、大貫隆、小林松、
筒井賢治：編訳
岩波書店
2022年刊
文庫判 510頁
1,518円

七、神は自らの中にあるという認識を通じた救済
『グノーシス』では「グノーシス」とは何かという問題に加えて、資料問題、ヴァレンティノス派など「グノーシス」に数えられる各派の教説、そしてその終極点としてマニ教が取り上げられている。いつもながらマルクシー



『グノーシス』
クリストフ・マルクシー：著
土井健司：訳
教文館
2009年刊
四六判 176頁
1,980円

スの議論はコンパクトで要点を外さないのが特徴である。さらにキリスト教内のグノーシス主義者は独自の教会をもっていたのか、といった踏み込んだ問題についても丁寧に論じていて興味

たとえば『ペトロの黙示録』という文書がある。教文館刊の「聖書外典偽典」の補遺Ⅱに収められているが、二種類の本文が残っていて、エチオピア語版と「アクミーム断片」と呼ばれるギリシア語版となる。以前中絶問題で論文を書いたとき参照したことがあったが、来世では女性が糞尿の池に首まで浸かって拷問を受けており、中絶された胎児が目から光線を出してその女性たちの眼に穴をあけるといふ（八章）。この典型的とも言うべき地獄絵図は、当時の社会状況、雰囲気や背景とするものであろうが、中絶胎児の無念と復讐とを描いている。アクミーム断片は簡略に記されており、エチオピア語版の方は詳しく描かれている。では『ナグ・ハマディ文書抄』に収められているコプト語の「ペトロの黙示録」にはどのように記されているのかを確認しようとする、なんとこの記

事が存在していないのである。いや、その記事だけでなく、まったく内容が違ふ。つまり同じ「ペトロの黙示録」という表題をもっている、異なる文書なのである。
外典文書を扱う時には同じタイトルでも内容がまったく異なる文書、さらに伝承過程で複雑に編集を施されたもの（その結果、全く別物になった可能性もある）等などに注意を払わなければならぬのであつて、素人が手を出すのは危険であらう。この点で『ナグ・ハマディ文書抄』は、大貫隆による詳細な序文、また各文書の解説などなど一つひとつ丁寧に取り扱われていて、直接「ナグ・ハマディ文書」を読むには最適の一書となつてい

であつたのか。グノーシスとは認識、知識を意味する一般的なギリシア語であつて、そもそもプラトンやアリストテレス等のギリシア哲学者も真の認識、グノーシスを求めたと言える。またこれをキリスト教内部の運動に限ることもできない。一定の傾向、世界理解としてこれを捉えるのが順当だと思われのだが、これはクリストフ・マルクシーの『グノーシス』に詳しい。
この問題について彼は類型論的モデルで答えている。つまり以下の条件を備えたものが「グノーシス」に数えられるといふ。
一、まったく彼岸の、遠い至高の神の経験
二、とりわけこの経験を条件とした、いっそう広範囲の神的諸像の導入
三、世界と物質についての悪しき被造物としての評価
四、自らの創造神あるいは守護神の導

伝道を支え、 活力を与える教義学

〈評者〉井ノ川勝



キリスト教教義学 下
近藤勝彦



待望の近藤勝彦著『キリスト教教義学』（下巻）が刊行された。上巻と併せて二三〇〇頁の大著である。これをもって、『キリスト教倫理学』『キリスト教弁証学』と併せて近藤「組織神学三部作」が完結した。日本においては、熊野義孝『教義学』以来の五七年ぶりの教義学の誕生である。著者の話によれば、まだ書き直したい箇所があると言ふ。その意味で、終末に向かって近藤『教義学』は書き続けられて行く。現代神学を代表するバルト、ブルナー、テイリツヒ、アルトハウス、ベルコフ、モルトマン、パネンベルク、熊野義孝等と対話をしながら、日本で伝道する教会のために独自の教義学を構築された。教義学は神学の全ての項目を網羅する。一つ一つ積み上げられたレンガを貫く心棒が堅固でないと、教義学は建設されない。そのために緻密で深い神学的思索が求められる。教義学は、イエ

ス・キリストにおける神の歴史の啓示に基づき、それを証言する聖書に従いながら、今現在のキリスト教会の信仰において、三位一体の神の救済史における救いの御業と御支配と御国の到来を認識し、その真理を学問的な手続きと表現によって論述する試みである。「三位一体論的救済史の神学」が、近藤教義学の心棒である。全項目がこのパースペクティブで貫かれており、新鮮な驚きと発見を与えられる。下巻は、教会論、救済論、神の世界統治、終末論が扱われる。歴史を生きる教会の存在意味、使命が主題となる。教会論の表題は、「神の国のための神の子たちの共同体としての教会」である。この表題に「三位一体論的救済史の神学」が表されている。神の国のための神の子たちの共同体に連なる出発点は、洗礼という三位一体の神の終末論的御業にある。洗礼者を生み出す「神の教会」を、「神の民」、

「キリストの体」、「聖霊の宮」の三つで言い表しているが、いずれも三位一体の神の位格と関わっている。それ故、「教会論」から「救済論」へと順序を辿る。教会論の中に、「教会の使命としての伝道」が位置づけられる。従来、教義学が位置づけなかった主題である。しかし、近藤教義学は一つの項目に伝道論を位置づけるだけではなく、全ての項目において伝道のパースペクティブで貫かれていく。謂わば「伝道的教義学」である。更に、教会論、救済論と終末論の間に、「神の世界統治」を位置づける。三位一体の神の救済史的御業は、教会を通して世界に及ぶ。教会の使命に、「キリスト教の世界政策」（トレルチ）があるからである。従って、弁証学的パースペクティブで貫かれる「弁証学的教義学」でもある。教義学は教会の自己保存の

ためにあるのではなく、世界、教会への危機から生まれる。そのために教義学は、教会のいかなる時代にあっても戦い抜く、神学的戦いの土台をなす。戦いは常にここから開始され、ここで支えられ、ここで活力を与えられる。全ては救済史の成就としての神の国における「アーメン、ハレルヤ」という神の栄光をほめたたえる神讚美を目指している。著者の篤い祈りが一つ一つの言葉に込められている。教義学に水野源三の詩が引用される教義学はないであろう。近藤教義学を通し、神学学徒の歴史を生きる姿勢が糾され、新たな召命を得る。近藤教義学の背後には、伴侶の祈りと最良の神学的対話の相手がおられることを忘れてはならない。

（いのかわ・まさる 日本基督教団金沢教会牧師）
A5判・一一八〇頁・定価一四三〇〇円・教文館

20世紀を代表する霊的指導者
ナウエンの主著、待望の新訳！



ナウエン・セレクション 傷ついた癒やし人 新版

ヘンリ・ナウエン 渡辺順子 訳 酒井陽介 解説

私たちは自分の傷を否定する必要はない。むしろこの痛みが隣人に共感する基盤となる。そう気づくとき、痛みは希望のしるしに変わる。「仕える生き方」を願うすべての牧会者、キリスト者必読の書。

第4回 記本
四六判・168頁・定価1980円

日本語で書き下ろす聖書注解



NTJ 新約聖書注解 エフエソ書簡

山田耕太

修辭学的批評により、現代に生きる私たちにとってエフエソ書の持つ意味を、テキストに絶えず問いかけながら解釈していく。

A5判・326頁・定価5280円

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail eigyou@bp.uccj.or.jp 《価格10%税込》
<https://bp-uccj.jp>

現代の預言者の声を聞く

〈評者〉安酸敏眞



悲劇を越えて
歴史についてのキリスト教的
解釈をめぐるエッセイ
R・ニーバー著
高橋義文・柳田洋夫訳



ついに待望の書が刊行された。本書はラインホールド・ニーバーの *Beyond Tragedy: Essays on the Christian Interpretation of History* (1937) の翻訳書であり、訳者はわが国のニーバー研究の第一人者であった故高橋義文氏と、氏と二人三脚でニーバー研究を牽引してこられた柳田洋夫氏である。さすがは専門家の訳だけに、訳文は精緻で熟れている。

本書は全部で一五編の「説教的なエッセイ」(sermonic essays) を収録した随筆集で、切り口は実に多様でありながら、ただ一つの主題を取り扱っている。その主題とは、「時間と永遠、神と世界、自然と恩寵の関係をめぐるキリスト教の弁証法的な概念」にほかならない。著者によれば、キリスト教の人生観・歴史観は「弁証法的」(dialectical) であるという。

著者は、キリスト教のかかる弁証法的な歴史解釈を、「欺いているようにでいて、真実である」「バベルの塔」「契約の箱と神殿」「四〇〇人対一人」「真の預言の評価基準」「究極的信頼」「幼少期と成熟」「キリスト教と悲劇」「苦難の僕と人の子」「価値転換」「力ある者と無に等しい者」「知識なき熱心さ」「裁きについての二つのたとえ話」「この世のものではない王国」「生の成就」という、一五のアスペクトにおいて縦横無尽に論じているが、その語り口は批評家のそれではなく、雄弁な説教者のごとくである。各エッセイを理解するのに、神学や哲学の特別な知識は要らない。読者は思わず知らず、見事な手さばきで紐解かれる聖書の世界に、まるで預言者か宣教師の言葉を直に聴いているかのように、引き込まれていく。

ニーバーの説教集としてはこれ以外に、『時の徴を見分されるが、筆者はこの書を通じてニーバーの虜(とら)となり、やがて本格的なニーバー研究に従事することになった。

翻訳書で読み直してみると、当時は見落としていた多くの発見があり、神学者としてのニーバーの偉大さを再認識することになった。それとともに、「現代の預言者」とか「アメリカからの預言者」と評される彼の「宗教的・社会的・政治的思想」の精髓に触れ直した思いがする。著者が本書で力強く説くように、キリスト教信仰は悲劇を越えており、われわれに悔い改めを促すとともに希望をもたらす。本書は、混迷を深める現代の歴史状況を聖書的・神学的に省察するための第一級の手引書であって、掛け値なしにお薦めできる珠玉の逸品である。

けい』 *Discerning the Signs of Times: Sermons for Today and Tomorrow* (1946) と同じものがあるが、この二つの説教集は代表作の『人間の本性と運命』 *The Nature and Destiny of Man* (1941-43) や『信仰と歴史』 *Faith and History* (1949) などで展開されている、ニーバーの「歴史の神学」を理解する上で、格好の手助けとなる。その意味では、本書はニーバー神学の最良の副読本といえよう。すっかり失念していたが、筆者が最初に原書で読んだニーバーの書物は、実は『悲劇を越えて』であった。手元のペーパーバック版の裏表紙には、「1975.8.1. Fifth Avenue, New York」と記入してある。さすがは京大の修士一年の夏に訪米した際、ニューヨークの五番街の書店で購入したものであろう。ところどころに若き日の書き込みが見いだ

(やすかた・としまさ) 北海学園大学学長
(四六判・三〇〇頁・定価三一九〇円・教文館)



神の子 イエス・キリストの 福音

主イエスと出会うマルコ福音書講解

久野牧
HISANO Nozomu



日々のはじめの
ひと時の
「黙想」の伴侶に

み言葉とおして「まことの人」であり「まことの人」と出会い、交わりのときをもちたい。その日を生き抜く力が必ず与えられるに違いない。

A5判変型・並製
定価 3,080 [本体 2,800 + 税] 円
ISBN978-4-86325-144-1



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-18
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

クレメンヌス関係の すべての邦訳が完成!

〈評者〉 小高 毅



キリスト教教父著作集 5
アレクサンドリアのクレメンヌス 3
『バイダゴゴス』(訓導者) 他
アレクサンドリアのクレメンヌス著
秋山 学訳



クレメンヌスの著作はしっかりとした意図のもとに組み立てられており、三部作を成していることはほぼ定説となっている。第一作にあたるのは本巻の二番目に掲載された『プロトレプティコス』(ギリシア人への勧告)、第二作に位置づけられるのが『バイダゴゴス』(訓導者)、量的にも大部を成す『ストロマティス』が第三部に位置づけられる。その構成を訳者は次のように指摘している。『プロトレプティコス』は「異教徒ギリシア人」に対する「キリスト教入信」に向けての「勧告」であり、それを受け継いで著述された『バイダゴゴス』はキリスト教倫理の基本的原則を記述しており、第三作にあたる『ストロマティス』は、多様な神学的諸問題を扱いつつ、霊的にも知的にも完成された「覚知者」(グノースティコス)に至る道程を記述する作品である。「グノースティコス」というと初代教会に

おいてキリスト教にとって脅威となった「グノース主義」との関係が問われることになる。それを知る材料となるのが『テオドトスからの抜粋』である。当然、『ストロマティス』の中でもグノース主義者たちへの批判を展開しているが、本巻に収録された『救われる富者とは誰であるか』にも次のような言葉が見られる。

「生命に関わる教えのうち最大で最も肝要なものとは、永遠にして永遠性の与え手、第一にして至高、一なる善き神を知ることである。……神は覚知と認識とによって捉えることができる。……神に関する無知は死であるのに対して、神に対する知識、親しさ、神への愛、そして神に似ることのみが生命だからである」(七・1-3、四九五頁)。

このように知識を重視しているが、「救いのための最上の道として」愛を掲げる。この愛こそがキリストの受肉と

受難にまで至る動機となるものである。

「父は愛することによって弱き者となり、そのことの偉大なる証しが、彼自身が自ら産んだものである。そして愛から生まれた実りも愛である。彼自らが身をへりくだらせ、人間性を身に帯び、人間の痛みを進んで受けたのも、すべてこのためである」(同上三七・1-3、五二七頁)。

そしてもう一つ興味深い点を挙げておこう。『バイダゴゴス』(訓導者)である。訳者は同書の解説で次のように述べている。

「本作品の第一巻では、神による教育、すなわちわれわれのための『教育者』たるロゴス(『御言葉』)・キリストによる神的教育の総論が述べられる……第二・第三巻では、服装、髪型、履物、貴金属、化粧、香油や花冠、食物、飲

物、飲酒、沐浴、睡眠、家財道具、饗宴、笑い、猿猴な言説(の禁止)、性倫理、家庭生活、菓草の使用、観劇、舞踏、音楽、肉体の鍛錬など、実に多岐にわたるテーマが取り上げられる。これらすべてが、いずれも純粹に靈的かつキリスト教的な視点のもとに置かれ、論じられているのが本作品の特徴である……紀元後二世紀における『キリスト教的礼儀作法』のありのままの姿を見出すことができよう。教父文献の中、これほどまでに古代世界における生活の日常を活写した著作は他に類例を見ず、その意味でも本著作は不朽の価値を有する」(二六七-二六八頁)。

(おだか・たけし「フランシスコ会士・司祭」
(A5判・六四八頁・定価一三二〇〇円・教文館)

ヨベルの新刊案内

伊東寿泰 [立命館大学教授] **英語の環境作りのススメ**

これで変わる! あなたの英語力!

四六判・272頁・1980円

英語を身につけて何がしたいですか?
 □映画「スターウォーズシリーズ」を字幕なしで
 楽しみたい! □ネットの海外ニュース、SNS
 を生の英語で体感したい! □ネイティブの友達
 と心おきなく語り合つのが夢! そのためには、
聖書は英語の学びや異文化理解にも役立つ!

ケズイック・コンベンション説教集

キリストの日に向かって

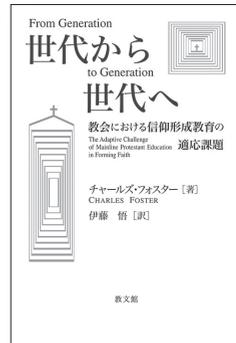
好評! 四六判・196頁・
1430円

「今の時代の苦難」と「やがて来るべき
栄光」との狭間に生きる使徒とは、
みことばを語る者自身がまず神のお
取り扱いを我が身に受け、その刻印
をもって取り次ぐ、それがケズイッ
ク! 聖霊の深いうめきが語る者、聴
く者に浸透し、旋律を奏で始める。

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F
TEL.03(3818)4851 FAX.03(3818)4858
出版の手引き / 呈 (税込)

ポストコロナ時代の日本の教会にも有益な提言

〈評者〉 岡村直樹



世代から世代へ
教会における信仰形成教育の
適応課題
チャールズ・フォスター 著
伊藤 悟 訳



著者が一九八〇年代以降のアメリカ合衆国（米国）のプロテスタント主流派（本書の中では旧主流派と表現される）における教会の若者減少の最大の原因として指摘するのは、急速かつ急進的に変化していく世の中であって、「キリストの体をつくりあげる」ための教育的ミニストリーと向き合ってこなかった（または適応することができなかった）ことである。もちろんそこに教会や教派のリーダーによる努力や挑戦がなかったというわけではないが、教派教育や教会教育が学校化され、交わりが年齢別に区分化（コンパートメントライズ）され、さらには教育の内容や目的が個人化する中で、若者の信仰形成に関わる実践神学的視点が重視されてこなかったことがその要因とされている。一九八〇年代以前に起こっていた人口増加とそれに伴う教会の若者の増加も多くの場合、宗教教育的課題とし

てではなく技術的課題として取り上げられ、上記のような教育的対応が継続する中で、世代を越えて存続する信仰共同体の形成という概念が蔑ろにされてきたことに対する反省が必要であると述べられている。これらの反省を踏まえた上で、著者によって必要な取り組みとして提案されているのは、世代を越えたメンタリング（指示や命令といった方法ではない、対話による気づきや自発的省察をもたらす、関係性を重視した人材育成の手法）や、「キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長する」（エフェソ四章一三節）ことを目標として信仰的実践を習慣化するといった、信仰の形成をサポートする教育のアプローチである。信仰的実践の習慣化を遂行する上で、著者は教会における「信仰問答的文化」の活性化（再活性化）を提唱している。「信仰問答的文化」とは、いわゆる

歴史的な信仰問答を、ただ復唱させ暗記させることではない。それは信仰問答の中で唱われている事柄を、意図的に実践と結びつけることを習慣化させることであり、人をケアし仕えるという教会の使命に若者を結びつけ、聖餐式を含む様々な教会行事の中で神の恵みと憐れみを繰り返し体験し、さらに世代を越えた対話を促すことである。またこれらの教育的実践に必要な不可欠なのは、「教育的イマジネーション」であるとも著者は語る。それは急速かつ急進的に変化していく世の中であって、教育者個人や信仰共同体が、それぞれ置かれたコンテキストにおいて、更なる信仰の高みや深みを目指して対話し、発案・実行することでもある。

子供を含む若年層の減少が近年著しいことは、日本のキ

リスト教界の存続にも関わる大きな課題であり、その趨勢を打開するための方策の考察や探求が続いている。本書には日本のキリスト教諸教会が、まずはそのような苦しい現状を分析し、その上でそれを突破するためのヒントが多く隠されている。原著の出版は二〇一二年であり、取り扱われているのは米国のプロテスタント旧主流派における事象である。そのような時間と空間の差異があるにも拘らず、著者によって試みられている様々な課題の明確化や、そこに付随する真摯な反省、さらには提示されている方向性や取り入れるべき方法論の提言は、ポストコロナ時代を生きる今日の日本のキリスト教界にとって、教団・教派（主流派や福音派）の壁を越えて有用である。

（おかわら・なおき 東京基督教大学大学院神学研究科教授
四六判・二九四頁・定価三七四〇円・教文館

ヨベルの月刊 / 既刊案内

「ヨーロッパ思想史」

金子晴勇

キリスト教思想史の諸時代Ⅳ 現代思想との対決

本巻全7巻完結!

世俗化の最終段階としての現代。無神論とニヒリズムの蔓延による「神の死」によって行き場を失った現代人の霊性にキリスト教はいかに応えるか。「諸時代」権尾を飾る渾身の論考。現代を「自己のみを抛り所として立つ排他的な自律によって破壊へと向かっていく時代」と捉え、キリスト教の枯れ果てない泉を提示。

084 新書判・264頁・1320円

キリスト教思想史の諸時代 全7巻別巻2

Ⅰ「ヨーロッパ精神の源流」【再版】【既刊】
Ⅱ「アウグスティヌスの思想世界」【既刊】
Ⅲ「ヨーロッパ中世の思想家たち」【既刊】
Ⅳ「エラスムスと教養世界」【既刊】
Ⅴ「ルターの思索」【既刊】
Ⅵ「宗教改革と近代思想」【既刊】
Ⅶ「現代思想との対決」【最新刊】

別巻1 アウグスティヌスの霊性思想 第八回配本
別巻2 アウグスティヌス三位一体論の研究 第九回配本

金子晴勇 東西の霊性思想 本邦キリスト教と日
再版 四六判下製・280頁・1080円

絶賛発売中!

新書判・平均264頁
各巻1,320円

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1-5F
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈 (税込)

青年のごとばに
心を傾けよう

〔評者〕 小暮修也



いのちの言葉を
交わすとき
「青年の夕べ」感話集
飯島 信編著



「教会に青年が集わなくなったのではない。彼らは求めている。しかし、彼らの問題意識を受け止め、それに応え得る教会が多くないことである。」(三頁)

これは、本書の基となる「青年の夕べ」を若い友と企画した飯島 信牧師の言葉である。

振り返れば、今から五〇年ほど前、教会は青年があふれていた。敗戦後の価値観構築の中で、青年は聖書の言を問ひ、躓きつつ、その言と格闘した。自らの心を見つめ、他者との関係を模索しつつ議論をたたかわせた。教会も懐深く青年を受け入れ、育ててきた。けれども、しだいに「教会に自分たちの声を受けとめてくれる場所がない」という青年たちの嘆きが聞こえるようになった。このような中で、本書は、いのちの言葉を交わす場の必要性を示している。本文から心に響く言葉を取り上げてみたい。

「ついに私は、こんなに苦しまなければならぬなら、キリスト教も神も捨ててしまえ、と決心した。全てを捨てたそのとき、私は心の奥に、何か温かいものを、愛を持って私を見守る視線を感じた。神を捨てたときに、私は神に再び出会った。」(三九頁)

「毎日一緒に作業し、一緒に食卓を囲む。同じジョークで一緒に大笑いしたり、ふとした瞬間に相手のよいところや相手との共通点を発見したりする。そんな生活をする中で、ある点では立場の対立する相手のこともごく自然に人間として見る事ができるようになった気がします。相手が『あちら側』ではなく、同じく神様によって造られ愛されている人間であるということ。……そんなことが実感できるのです。」(九四頁～九五頁)

「コロナ禍で、苦勞、悲しみ、大変さ、自分の生きてい

る時間の不都合、それに対する自分の生き方への反対を味わってきました。今も少しそれらは続いています。でも、そんな私だから、それらに打ち勝つことが出来ます。そんな私だから、世界は本当に面白くなります。そのことに誇りを持ちたいです。誇りを持って、自分の生きてきた時間を、過ごしてきたあり方を、ちゃんと自分の人生として携えていたいと思います。今も、この先も。」(一四二頁)

教会が青年への取り組みをするときに、最も大切なことを青年たちは伝えてくれる。

『「青年の夕べ」では、感話をする人も聴く人も真剣に、自分の心と向き合い、友(になろうとする人)に問いかけ、問いに真剣に応えようとしていたのではないのでしょうか。そこには、心が、いのちが問うような、ことばを通した、

また同じ時と場所でも共有する空気を通じた交流があったと私は感じました。」(一八一頁)、「青年の夕べは、聞いてもらえるという安心感がベースにあつて、話すことができた場所。同様に、そのような場所だからこそ、聞く側として心を開こうと祈れる場所でもあつたように思います。」(一八二頁)

この「青年の夕べ」では「私は問われたとき以外は黙し、ひたすら青年のごとばに心を傾けた」と飯島牧師は語る。

近年、コロナ禍で自らの生き方や他者との出会いに悩む青年も増えている。本書を参考にして、日本のキリスト教会が青年の心豊かな成長のために、一つでも多く、青年たちの声を聴く取り組みを始めてほしいと願っている。

(こぐれ・しゅうや 明治学院前学院院长)



新刊

ルター研究

第18巻

ルター研究所 編
●A5判並製 定価2,200円

特集
ルター「マグニフィカート講解」500年

待つということ
江口再起

●

ルターとマリア
多田 哲

●

連帯から生まれる
社会変革のことば
安田 真由子

●

J・S・バッハ《マグニフィカート》
の諸問題(上)
加藤拓未

特集 ルターと戦争

よい市民、よい隣人であれ
高村敏浩

●

『トルコ人に対する
戦争について』を読む
立山忠浩

●

戦争を神学する
ルターとボン・ヘッファー
江口再起
ほか3編の論考を収録

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402
☎03-3238-7678 FAX03-3238-7638

盆栽ではなく、大木

〈評者〉藤本 満



聖霊の上昇気流
神は見捨てなかった
岩本遠徳著



著者は、オーストラリア国立大学で言語学博士論文のためにバプア・ニューギニアでの研究の傍ら、福音を伝えたい宣教師であった。現在は神田外語大学大学院で言語学の教授、単立「キリストの平和教会」の牧師である。多彩な活動、柔軟な理解、真実な体験、喜びと祈りと感謝の人のゆえに『366日元氣が出る聖書のことば』—あなたはひとりではない—(ヨベル、二〇二〇)は、広く用いられている。

本書は著者の自伝であるが、現代キリスト教会に最も必要とされる使信—十字架に現された神の愛、聖霊による生けるキリストの現実的体験—を紐解いている。本書に、青年時代の著者を誤った方向へと導こうとした人物に、著者の母親が宛てた手紙の一文が記されている。「私たちは、子どもを大木になるように育てて来ました。盆栽にしよう

とはしないでください」(94頁)。まさにそのように大海原にこぎ出そうと、小舟を砂浜から波際に押し出している少年が、本書の扉をカラーで飾っているのが印象的である(和紙ちぎり絵作家・森住ゆきさん)。

本書を読み終えて、旧約聖書のヤコブの言葉を思い起した。「今日のこの日まで、ずっと私の羊飼いであられた神」(四八・15)。ヤコブは、神が父イサク・祖父アブラハムの神であったことを添えている。神は著者の生涯のあらゆる場面で共におられ、助けを送ってくださいました。その神が祖父とともに、両親と共におられたことから本書は始まる。祖父(義理)は、原爆で焦土となった長崎で神の声を聞いた。「恐れるな! 進め! 汝を助くる者多し」。そこから長崎製鉄所を復興した。神のこの声は、著者の家系に響いている。『366日元氣が出る聖書のことば』の副題は、

「あなたはひとりではない」である。そして本書の副題は、「神は見捨てなかった」である。いや、そればかりか、神は折りにかかって「助ける者」を送りつけてくださった証しである。

東京学芸大学・国際基督教大学大学院で言語学に魅了され、オーストラリア国立大学で博士論文を書くためにニューギニアの奥地で研究、帰国しての長老教会での教会生活、お茶の水でのミッション・エイド・クリスチャン・フェローシップでの働き、キリストの平和教会の開拓と、著者を助ける者がいつも神のもとより送られてくる。そして、最大の助け手は、大学時代に出会い、後の伴侶者となる横山あずささんであった(105頁)。

本書を通して理解できる、著者の生涯的な強調である

「十字架・生けるキリスト・聖霊体験・祈り」が手島郁郎から来ていることが、著者「遠徳(エノク)」は手島の命名による。手島没後、一家は「原始福音・神の幕屋」の変容を批判して離れる。しかし、手島が病者に神の愛を届けようとして、また著者が少年時代にモロカイ島のハンセン病施設に生涯をささげたダミエン神父に「あこがれたように、著者のニューギニアでの研究の月日は、マラリアに冒された村民のためにも注がれた。神の愛を伝え、自分が所持していたマラリアの予防薬・治療薬クロロキンを与えているうちに、もってきた薬の瓶が空になってしまふ。そこにまた、神は助け手を送ってください。まことにスリル満点に描かれている。

(ふじもと・みつる)インマヌエル高津教会牧師
(四六判・二六四頁・定価一九八〇円・ヨベル)



キリスト教書総目録 2023年版

キリスト教の視点から考察するのライオン問題

巻頭カラー

藤原淳賢氏 高橋沙奈美氏

(12月中旬発売)

内容

総記年鑑 辞(事)典 図説年表/全集(著作集) 叢書講座/聖書/聖書学/神学/宗教学/思想倫理/伝記(ライオン)/信仰入門書/人生論/説教集/文学小説/評論エッセイ/詩劇/音楽/美術/建築/教育保育/心理/社会福祉/児童/絵本/讃美歌/式文/DVD CD 点字/キリスト教関連雑誌・新聞書名索引/著者索引/掲載出版社名簿

■A5判 一般頒価1冊286円+税 送品手数料200円
■お近くの書店様でお求めください。

一般財団法人 キリスト教文書センター

〒162-0814 東京都新宿区新小川町9-1
TEL:03-3260-6520

気っ風のいい話し言葉が 柔らかく刺さる

〈評者〉**深澤 奨**



少女の命・女性の命、
嵐の中から新たな命
吉岡容子著



なんだろう、このすがすがしい読後感。一編読む毎に、胸の中にわだかまっていた聖書へのモヤモヤ感が少しずつ解きほぐされていくような、教科書通りの教理や解釈への疑問や不満に市民権が与えられていくような、そんな爽快感を覚える説教集でした。僕がずっと言いたかったのうまく言えなかったこと。勇気がなくて言えなかったこと。反論に身構えてガチガチの言い方しかできなかったこと。それを何の恐れもてらもなく、肩を怒らすこともなく、飾らない言葉で言っている。そんな吉岡さんを、一時期同じ佐世保の町で教派は違えど同志の仲間として歩ませてもらった僕は、とてもうれしく思います。

「神から賜る家族の痛み」は、ルカ二章「神殿での少年イエス」を扱った説教。いわゆる「聖家族」について論ずるのですが、のっけからこの言いようです。

いい断言。すてきです。しかもそのぜんぜん教科書通りではないところが。下僕たちに専ら焦点を当ててこの物語を読む、ということを僕は思いつきませんでした。

この説教集の通奏低音はやはりフェミニニストの視点。そこは、悔しいけれど自称フェミニニストの僕には追いつけません。やっぱり男だから。説教集のタイトルでもある「少女の命・女性の命、嵐の中から新たな命」では、マルコ五章の「会堂長の娘と長血の女」の物語が、女の視点で鮮やかに語られ、そこにはこれまでの読みや日本語訳聖書への「異議申し立て」が溢れています。そして説教のラスト三行。

他ならぬイエスの私への私たちへのことば、「ホラ！起きろ！ 歩け、私と共に歩くんだ」。なぜなら、この後イエスご自身が、暗い墓の中でその声を聴くハメになったのですから。「ほら、起きろ、歩け、もう三日目だぞ、いつまでも寝ているんじゃない」と……

最後に、この説教集の大きな魅力は、吉岡さんの普段通りの話し言葉による説教だということです。けっこう独断的で挑戦的な、しかし学問的にもしつかりした水準を備えた説教が、少しも嫌みに聞こえないのはその口調の柔らかか

私は今日、「聖」だなんて冗談にも悪ふざけが過ぎる、と言いたい。「聖」なんぞという思い込みを誘う形容がいかにも大間違いか、それをきちんと思い起こすのが今日の説教の主題です。

イエスを神棚に祀り上げ、「聖」なる装いで飾り立てることは決して見えてこない福音を、こうして吉岡さんとはとてもうまく垣間見せてくれています。

「見えざるホスト、その宴」は、ヨハネ二章「カナの婚宴」を扱います。吉岡さんは九節の「このぶどう酒がどこから来たのか、水をくんだ召使いたちは知っていたが……」という一文を指して言います。

神の業を目撃したのは、下僕（召使いたち）です、と。この一行こそが一番大事なのです。これがなかったら……

この物語で一番大事なのはここだ、というこの気っ風のさ、自然さにあります。その説教の聴衆・読者が、最初の伝道者となったサマリアの女に対して男たちが言い放ったような失礼極まりない言葉を口にしないう願うばかりです。「我々が信じるのは、もはやあなたのおしゃべりによつてではなく、我々自身が聞いて、この方こそ本当に世の救い主であると知ったからなのだよ。（ヨハネ四章四二節・拙訳）。でも言いそうだよなあ、まだまだ。

（ふかさわ・しょう＝日本基督教団佐世保教会牧師
（新書判・一九二頁・定価二二〇円・ヨベル）

村椿嘉信著 *絶賛発売中*

荒れ地に咲く花

生きることを愛すること

混沌とした時代にあつて、社会のさまざまな問題と関わりながら、どのように生きるべきなのか。イエスは「愛すること」が決定的に重要だと指摘した。

四六判・160頁
定価 1,320円
ISBN978-4-909871-43-5

ヨベル YOBEL Inc.
お問い合わせ: info@yobel.co.jp
情報: <http://www.yobel.co.jp>

聖書が語る「愛」を丁寧に
追う平易かつ専門的な一冊

〈評者〉辻 学



アガペーとフィリア
愛についての聖書学的考察
原口尚彰著



キリスト教においては愛がよく語られる。だが、聖書が愛についてどう述べているかを聖書全体にわたって調べようとすると、意外と手頃な書物が見当たらないことに気づく。ドイツ語や英語でも良ければ、キツテルの有名な『新約神学辞典』(ThWNT)をはじめとする事典類はあるし、愛を主題にした専門書も外国語なら存在する。だが、日本語となると、なかなか適切な文献がない。『旧約新約聖書神学事典』(教文館)は便利だが、聖書本文の詳細な分析は見られない。

その欠けを補う良書を、このたび原口尚彰氏が公刊してくれた。本書は、愛を主題として旧約聖書から初期ユダヤ教文書、そして新約聖書を概観する試みである。まず第1章では、旧約聖書において愛がさまざまな人間関係(恋愛、夫婦、親子、兄弟、友人)の中で描かれていることを示し、

にも目配りしつつ、新約聖書の諸文書(福音書、ヨハネ書簡、パウロ書簡、コロサイ、エフェソ、ペトロ、ヤコブといった新約後期書簡)を取り上げていく。各項目の最初に「語学的考察」が置かれ、愛に関する用語の使用頻度が提示されているのは、いかにも釈義の基本を重視する著者らしい。福音書の分析では、物語の中で描かれる愛にも注目し、単なる概念のみならず、行為としての愛という側面も強調されている。ガリラヤ湖畔で復活のイエスとペトロが愛をめぐって対話する場面(ヨハネ21章)で、アガバオーとフィレオが交錯する点に著者が特別な意図を見て取っているのは興味深い(81頁)。新共同訳や聖書協会共同訳はいずれの動詞も「愛する」と訳している)。

聖書および関連文書において愛がどのように描かれているかを、統計や本文の分析に基づいて一つ一つ論じていく本書はさながら、愛に関する「日本語版新約神学辞典」の

さらに神の愛が「選び」「救い」「憐れみ」「慈しみ」といった表現で示されていることを、聖書の箇所をていねいに挙げながら論じている。愛はまた神からの戒めでもある。神への愛(申命記6・4〜5)と隣人愛(レビ記19・18)が、神の愛に応えるイスラエルの責務であることも、この関連で示されている。

旧約外典・偽典、死海文書やアレクサンドリアのフィロン、さらにラビ文献といった初期ユダヤ教文書の中で愛の主題がどのように展開されているかをたどる第2章に続いて、第3章では新約聖書における愛の主題が多くを費やして検討されている。古典ギリシア語においては、「愛」がもっぱら「エロース」と「アガペー」、「フィリア」という名詞(とその動詞形)によって表されるが、著者はさらに、愛の関連語として「憐れみ」や「同情」といった概念

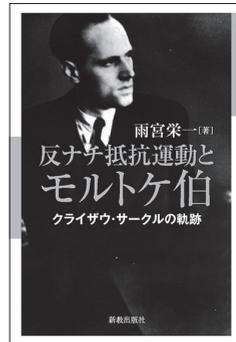
ようである。著者独自の仮説に基づいた議論の展開もなく、全体に叙述は抑制された調子で展開されている。しかも、時として専門的な内容に踏み込んでいながらもかかわらず、文章は平易で、聖書釈義に通じていなくても十分に内容が理解できる。一方、さらに踏み込んだ議論を期待する向きには、脚注で研究文献が紹介されているので、そこから考察をさらに深めていくこともできるようになっている。

著者に聞いたところでは、本書は神学校における授業内容に基づいていると、授業の充実ぶりもうかがえる。教会や学校等で、聖書が語る「愛」を学ぶ際に、基本の文献として活用されることをお勧めしたい。分量も価格も手頃で、手元に常備しておきたい一冊である。

(つじ・まなぶ 広島大学教授)
(A5判・一五八頁・定価一七六〇円・リットン)

信徒の貢献と その信仰を掘り起こす

〈評者〉小海 基



反ナチ抵抗運動と
モルトケ伯
クライザウ・サークルの軌跡
雨宮栄一著



「日本の教会で何故ドイツのような闘い、取り組みがなせなかったのか」という強い問題意識をもって生涯をかけてドイツ教会闘争の研究に取り組み、二〇一九年に逝去された雨宮栄一牧師の遺稿が、待望の出版となった。

闘争史に分け入る誰もが抱く疑問に、ヒトラー暗殺への関与の是非がある。国防軍軍人を中心としたボンヘッファーたちのゲルデラー・サークルは暗殺計画を繰り返し、ついに七月二〇日事件（ワルキューレ作戦）の失敗によって多数の犠牲者を出した。「暗殺計画にあまりに依存しすぎ」た（一九二頁）と本書でも指摘されている抵抗運動の弱点もあった。人生で一度は平和主義に立っていたはずの牧師や信徒たちが自分の信仰の中でどのように心の整理をつけていたのかという問いは今も残り続ける。敗戦後、抵抗権が法的に整備され、名誉回復の再審裁判が次々と起こ

されるはるか以前の時代である。

ドイツ教会闘争研究は、ニーマラー、バルト、ボンヘッファー等々、どうしても牧師や神学者を中心に追いがちである。その中で、神学的に語ることにない信徒たちが（著者が前著で扱ったペーレルス弁護士も含めて）牧師に優るとも劣らないどころか、過酷な最期を遂げながらも重要な役割を担っていったという事実を掘り起こし、ひとつひとつ明らかにしていったのが著者最晩年の諸著作だったのだなど、改めて思う。読み応えのある一冊である。

本書で扱われるジエームズ・フォン・モルトケ伯らのクライザウ・サークルは、ヒトラー暗殺やクーデターを志向せず平和主義に徹した抵抗グループである。若いころから英語が堪能な弁護士で海外に広くネットワークを持つ彼のもとで、一九四〇年代に形成されたこのサークルには、社

会主義者、労働運動指導者、官僚、カトリックとプロテスタントの違いを超えた聖職者と信徒、抵抗派の国防軍軍人、ヴァイマル共和国支持者などと、他の抵抗グループには見られない多様な顔触れの、主に三〇代の人々が集まった。敗戦後の新生ドイツの再建計画を練り、連合国に抵抗運動の存在を知らせ、敗戦工作を行った（五〜七章に収められた三回にわたる協議会報告の詳細は圧巻！なるほどこれが六七年のヨーロッパ共同体E.Cや九三年のヨーロッパ連合につながったという指摘も納得！）。巻末に挙げられているモルトケ伯以外の主要人物二一名中生き残った者はわずかである。その中にはテゲル刑務所付牧師としてボンヘッファーたちを支えたベルヒヤウ牧師もいて、その広がりには驚かされる（テイリツヒの神学がその広がりにも貢献していたことも本書から得た発見の一つ）。

それにしてもこれはドイツ教会闘争の全体像を俯瞰していた著者だからこそ書ける一冊である。その行間からうかがえるのは、残された資料発掘の苦勞である。ゲシュタポの厳しい捜査や逮捕の連鎖を避けるため本人たちが証拠文書を残さなかったことに加え、逆にナチも連合国側の追及を避けるために敗戦直前に重要資料を処分した。

敗戦後のドイツ国内では五〇年代まで彼らに対する犯罪

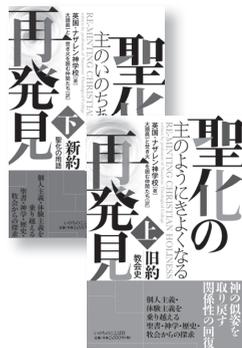
者扱いが続き、年金申請も退けられ、遺産も凍結され、モルトケの妻フライヤはまだアパルトヘイト政策が始まっていなかった南アフリカに移住を余儀なくされた。更に東西分断が再評価の足かせとなった。五〇年代には暗殺計画グループの再評価が始まっていたのに、モルトケらの非暗殺計画グループの再評価は八〇年代になってからだという。巻末に収められている二八の重要文献の三分の二はようやく二一世紀になってから出版された。教会闘争の全貌に迫ることの困難さがうかがえる。

ベルヒヤウ牧師の仲介で交わされたモルトケ夫妻の往復書簡は、二〇〇九年によく公開が許可され、二〇一〇年刊行された。六〇〇頁に及ぶというこの『テゲル刑務所からの別れの手紙』を今私は心底読みたいと願っている。

（こかい・もとい 日本基督教団荻窪教会牧師）
（四六判・三六四頁・定価三八五〇円・新教出版社）

自己理解と
相互理解のために

〈評者〉 原田彰久



聖化の再発見 上 旧約
教会史
聖化の再発見 下 新約
聖化の用語
英国ナザレン神学校著
大頭眞一と焚き火を囲む仲間たち訳



「『新改訳』……が礼拝用として協会訳「口語訳」に代わり得るかどうか、疑問である。それは訳文の優劣というよりも、『新改訳』が特定の教派「ファンダメンタリストの人々とときく」による翻訳であるというところに問題があるのではなからうか」（永嶋大典、『英訳聖書の歴史』、研光社出版、昭和六十三年、一七四ページ）。評者は主流派にあつて福音派（あえて言えば、ファンダメンタリスト）の立場であるが、こうした評価は、今も変わらないであろうか。本書は、そのようなキリスト教界の自己理解と相互理解に資するものとして、一石を投じる重要な出版である。

① 自己理解のために

まず本書は、ホーリネス派のアイデンティティを明らかにしている。執筆者たちの属する神学校は、日本ナザレン教団と同じ、十九世紀の北米ホーリネス運動の流れにある。

する上で有益である。「解説」で、旧約聖書学が専門の鎌野直人（関西聖書神学校）が「北米『きよめ派』……で展開されている議論があまりにも稚拙であつたことを思い出す。本書で……はるかに学問的にも耐えうるものであることを、たいへん嬉しく思っている」（下巻、一九三ページ）と述べている。

また神学校の講座で「きよめ派出身の学生たちは、内輪のことばを問わずに教義を明確にすること、……聖化への呼びかけに惹かれている人々の洞察を取り入れることが求められた」（上巻、八ページ）とある。こうした内容をふまえ、自己や相互、特に日本の読者に対して、イギリスのジョン・ウエスレー、北米のフィービー・パーマーなど、これまでの「ホーリネス」理解を生みだした歴史、その概略図を示す丁寧さが求められるのではないか。

③ 今後の課題

最後に、上巻の第九章に「私たちは『ベウラの地に住まう』……の讚美歌をよく歌った」とある（九五ページ）。なぜ「ベウラの地」について歌うのか（聖歌六〇番）、他の伝統はもとより、私たち自身もあまり知らないのではないか。「ベウラの地」はイザヤ書六十二章四節にある。だが元来は、ジョン・バニヤンの『天路歷程』で天国の門

しかし、イギリスにあることで、北米とは異なる特色を持つ。

本書出版のきっかけは。監訳者の大頭眞一が抱いた「違和感」（上巻、二七三ページ）であつた。その原因は、北米のホーリネス運動とその理解の上に日本の「きよめ派」が形成されてきたからである。本書は「ホーリネス」について、主として聖書学に基づく考察である。その点では、立場を越えた視点を提供していると言えよう。上巻は旧約から、下巻は新約から検討しているが、上巻には、短いながらギリシア教父の聖化理解も取り上げている（第二章）。特に、第一章「聖化の再発見の必要性」と第二章「スタートポイントはどこに」は繰り返し読みたい。

② 相互理解のために

次に、他の信仰伝統から、いわゆる「きよめ派」を理解

の手前にある「ベウラの地」（地上の到達地）を指している。十九世紀北米ホーリネス運動は、救いを旅（天路歷程、出エジプト）として理解し、「ホーリネス」の体験を地上の目標としたからこそ「ベウラの地に住まう」と歌う。こうして、分かっているつもりのことを再確認しつつ、新たな地平を開くために、本書は大変有益である。主流派で「聖化」に惹かれている人があろうことを期待して。

（はらだ・あきひさ＝東京聖書学校教授）

（A5判・上…二八八頁、下…二九六頁・定価二二〇〇円・いのちのことは社）

※編集部よりお詫び

ご覧いただいている24・25頁は、先月号（二〇二三年一月号）にて掲載しました原田彰久先生ご執筆の『聖化の再発見』上・下巻書評の再掲載になります。

前号の誌面では本ページ上段の後ろから6行目が1行分抜けております。ご執筆いただいた原田先生並びに読者の皆様には大変なご迷惑をおかけしてしまい申し訳ありませんでした。お詫びと共に本書評を再掲載させていただきます。

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jp-shop.com	sesaki@jp-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zenrikan_systen_0530@ghoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台青葉区1-36 教団センター・イワフ	022-223-2736	共用		fcwkwk524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区新富2-2 千葉カリスチャペル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vestia.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.avaco.info	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
アバコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taisindo-books.jimbo.com/	taisindo@jcom.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス青山	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3567-1995	03-3567-4435	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
東京キリスト教書店	162-0814	東京都港区新川町9-1日キ駅前(外観専門)	03-3280-5663	03-3280-5637		tokyo@nikkhan.co.jp	00130-3-60976
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.brighter.jp/~yokohamads/index.html	sksch@mmva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市中区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://nagoya-seibunsha.la.cocacn.jp/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834	http://web.kyoto-net.co.jp/people/kyotan/	kyotan@mtbx.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0013	大阪市北区茶屋町2-30	06-6377-6026	06-6377-6027	http://osekaobs.web.fc2.com/	ochbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
ハイブルハウスびぶるの森	591-8041	堺市北区東雲東町1-1-16	072-257-0909	072-253-6132		sakai-jbs@bible.or.jp	00160-2-18410
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三層ビル2F	078-331-7569	078-945-9388		kobex@nikkhan.co.jp	00170-2-421390
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
リバーサイドブックス	779-1105	徳島県阿南市羽ノ浦町古庄大道ノ西13	090-8694-4986	050-3142-3017		ykwbt3@gmail.com	16220-17974891
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.geofis.jp/masuyara_107/index.html	sksch@ddokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上富野5-2-18	093-967-0321	共用		kebookcenter@bible.or.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleruya@bible.or.jp	00160-2-18410
沖縄キリスト教書店	904-2143	沖縄県沖縄市知花4丁目12-33	098-927-0220	098-938-1102	https://www.okinawacbs.net	info@okinawacbs.net	01790-4-152916

※一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

既刊案内 (2022年10月~2022年11月)

編・著・訳者	書名	判型	頁	定価(税込)	版元	発行日
Rニーマー著／高橋義文、柳田洋夫訳	悲劇を越えて —歴史についてのキリスト教的解釈をめぐるエッセイ	四六	300	3,190	教文館	10/5
梅津順一	大学にキリスト教は必要か —新しい時代を拓くもの	四六	208	1,870	教文館	10/19
チャールズ・フォスター著／伊藤 悟訳	世代から世代へ —教会における信仰形態教育の適応課題	四六	294	3,740	教文館	10/25
J.ゴールディングイ著／本多峰子訳	神の物語としての聖書	四六	228	2,640	教文館	10/25
石田 健	田中正造 —その生と信仰	四六	336	3,520	一麦出版社	10/13
袴田 康裕	ウェストミンスター 信仰告白講解 上巻	A5	362	4,840	一麦出版社	10/26
雨宮 栄一	反ナチ抵抗運動とモルトケ伯 —クライザウ・サークルの軌跡	四六	364	3,850	新教出版社	10/14
宮田 光雄	良き力に不思議に守られて —講演・説教・論考	小B6	173	1,540	新教出版社	10/25
瀧澤 武人	エッセイ 好きやねん、イエス!	四六	288	1,980	ヨベル	10/20
岩本 遠徳	聖霊の上昇気流	四六	264	1,980	ヨベル	10/27
原口 尚彰	アガペーとフィリア —愛についての聖書学的考察	A5	158	1,760	リトシ	10/24
森下辰衛監修／森下辰衛、上出恵子、奥野政元著	あらすじで読む 三浦綾子名著36選	四六	160	1,760	日本キリスト教団出版局	10/25
石丸 昌彦	老いと祝福	四六	216	2,420	日本キリスト教団出版局	10/25
栗原 茂	ある牧師の眼 —その視線の先にあるもの	四六	349	2,200	リトシ	11/1
ルター研究所編	ルター研究 第18巻 いのちの言葉を交わすとき	A5	191	2,200	リトシ	11/1
飯島 信編著	「青年の夕べ」感話集	四六	204	1,540	ヨベル	11/1
山口 勝政	みことばの楽しみ —詩篇119篇に徹して聴く	新書	236	1,320	ヨベル	11/15
大井 満責任編集	2022 ケズイック・コンベンション説教集 キリストの日に向かって	四六	196	1,430	ヨベル	11/24
中井 珠恵	スピリチュアルケア 入門篇	四六	224	1,760	ヨベル	11/24
日本キリスト教詩人会編	詩華集 聖書における光と影	B6	160	1,980	教文館	11/4
フスト・ゴンサレス著／神代真砂実、高野佳男訳	21世紀のキリスト教入門 —一つの教会の豊かな信仰	四六	224	2,200	教文館	11/16
N.T.ライト著／岩上 敬人訳	N.T.ライト新約聖書講解10 すべての人のための ローマ書2—9-16章	四六	196	2,310	教文館	11/16
朝岡 勝	大いに喜んで —ヨハネの手紙第二、第三講解説教	B6	160	1,980	教文館	11/16
片柳 弘史	日々を生きる力 —あなたを励ます聖書の言葉366	文庫	390	990	教文館	11/22
平野 克己	使徒信條 光の武具を身に着けて	四六	128	1,430	日本キリスト教団出版局	11/15
鈴木 佳秀	VTJ旧約聖書注解 申命記	A5	498	8,580	日本キリスト教団出版局	11/25
久野 牧	神の子イエス・キリストの福音 —主イエスと出会うマルコ福音書講解	A5変	302	3,080	一麦出版社	11/19
大野 恵正	旧約聖書入門4 —現代に語りかける歴史書	小B6	400	2,090	新教出版社	11/22
ジャン・カルヴァン著／森川 甫、吉田 隆訳	カルヴァン新約聖書註解2 共観福音書下	A5	480	6,600	新教出版社	11/25

福音と世界

2023年2月号

特集 何が「われわれ」をつくるのか―共感をめぐって

寄稿者 川風巻浩、桜井智恵子、阿久澤麻里子
原由利子、小田原のどか、ジェシカ・カワムラ

書評 J・D・クロツサン『最も偉大な祈り』（福嶋揚）／座談会 教会の人事とジェンダー問題
／好評連載 古代イスラエル文学史序説（勝村弘也）、サンタース&ヤーパー「教会におけるマイクログレクション」訳・解説Ⅱ真下弥生、
「日本のキリスト教」を読む（山口陽二）ほか

A5判・定価660円・〒70円
定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148
Email: sales@shinkyō-pb.com

編集室から

読者のみなさま、あけましておめでとうございます。……こんなことを書いている筆者は現在師走のど真ん中だ。僧侶がお経をあげるために東西を馳せる月というのが師走の語源らしいが、出版業を営む筆者たちにも師走の忙しさがある。年末の駆け込み入稿、教会ではクリスマス準備……。何が言いたいかと言うと、つまりゆつくり本を読む時間がない、ということだ。

最近友人が自分の習慣を教えてくださいました。金曜日になるとろうそくを灯して、ドリンク片手に好きな本を読むのだそうです。本人いわく日常を区切る儀式のようなものだと。みなさまからすれば、「なににもそんなカッコつけなくても」と思うところだろう。しかし、毎日パソコンの前に座り、

予告

本のひろば

2023年3月号

本・批評と紹介

（巻頭エッセイ）津田謙治、（書評）日本キリスト教団出版局編『八木重吉 家族を詩う』、青野太潮著『どう読むか、聖書の「難解な箇所」』、高橋秀典著『心が傷つきやすい人への福音』、ジャン・カルヴァン著『共観福音書 下』、袴田康裕著『ウエストミンスター信仰告白講解 上巻』、山口勝政著『みことばの楽しみ』他

通勤中もスマホ、家でも通知を気にして……そんな生活をしていると、その読書時間が「特別な体験」になるそうだ。SNSでこんな教員の投稿を目にした。「家でSNSやユーチューブを見て一日が終わっていくことに、『本当にこれでいいのか』と思っているけど、かと言って何をしたらいいのかわからない、という学生の話をよく聞く」。もしかするとデジタルコンテンツには、生きている感覚、つまり「体験」としての価値を人間はあまり見出せないのではないかな。筆者も、デジタルコンテンツを見てみると「時間を無駄にした」という感覚がどこかにあるが、読書ではたしかにそんな感覚がない。読書というものが現実から少しずつ遠のいているような現代だからこそ、「特別な体験」としての読書というのも拡げていけたら。例えば、週末の礼拝堂で出入り自由の読書会なんていかがだろうか？（桑島）



旧約聖書入門 4

現代に語りかける歴史書

11月22日

大野恵正 著

定評のシリーズ（おののよしまさ氏は活水女子大学名誉教授。新共同訳聖書の翻訳に関わった）

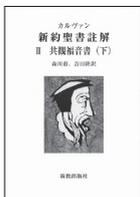
ヨシユア記、士師記、サムエル記上下、列王記上下、歴代誌上下、エズラ記、ネヘミヤ記、ルツ記、エステル記を扱う。

◆小B6判・定価2090円

既刊

- 1 現代に語りかける原初の物語
- 2 現代に語りかける父祖たちの物語
- 3 現代に語りかける出エジプトと契約

◆定価1980円
◆定価2090円
◆定価2090円



共観福音書下

カルヴァン新約聖書註解Ⅱ

11月22日

ジャン・カルヴァン 著／森川甫・吉田隆 訳

福音書の「調和」を見出そうとしてマタイ・マルコ・ルカの三福音書を対観しながら註解する。改革者の聖書積義の真髄を示す書。上巻から38年ぶりに完結。愛書家のため函入上製本を限定200部制作します。専門書店にご注文下さい。

◆A5判・並製・定価6600円／◆上製函入・定価7920円

既刊

共観福音書上（オンデマンド） 森川甫 訳

◆A5判・並製・定価6270円

旧約聖書

物語としての歴史

神を尋ね求めた
人々の言葉



B・W・アンダーソン 著／高柳富夫 訳

1月25日

1957年の初版以来5度におよぶ改訂を重ね、今日にいたるまで半世紀以上も旧約入門・概説書として絶大な信頼を得ている名著。著者の流麗な筆致は、歴史的研究、考古学的調査、文学批評、聖書神学をひとつの「物語」に編み込み、800頁を超える大著ながら、読者を巨大で複雑多様な旧約の世界にぐいぐいと引きずり込む。

◆A5判・定価7920円

注目の新刊

ロゴセラピーと物語

勝田茅生 著

◆小B6判・定価1760円

フランクルの創始したロゴセラピーの核心的なメッセージを、多くの民話や寓話を例にとりながら分かりやすく説き明かし、豊かな気づきにいざなう。様々な生きにくさを抱えるすべての現代人に贈る〈希望の書〉。著者はドイツ在住のロゴセラピスト。





マルコ福音書を讀もう

いのちの香油を注ぐ 増田 琴

共同体から排除された人への福音を現代の課題と向き合いつつ語る34のメッセージ。異邦人の女、けがれた者とされた長血の女、香油を注ぐ女など、多くの人物をイエスによる癒やしと和解の本質を通して印象的に描く。

2023年1月25日刊行予定

◆四六判 並製・256頁・定価2,640円

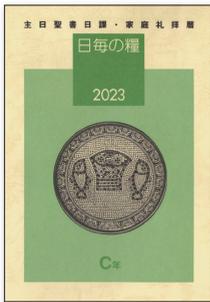
ライフサイクルと信仰の成長

礼拝と教会教育を通して

J.H.ウェスターホフ / W.H.ウイリモン
荒井 仁 / 越川弘英 訳

2023年1月25日刊行予定

誕生、結婚、離婚、引越し、引退、葬儀など、人生の折々の出来事と共にある礼拝に向けて、礼拝学とキリスト教教育学の大家が提案する礼拝ガイド。洗礼や聖餐、教会暦など礼拝の基本も丁寧に解説する。礼拝を活性化させるための必読書。 ◆A5判 並製・208頁・定価3,080円



電子書籍版 好評配信中!

聖書日課『日毎の糧2023』

電子書籍版では1日ごとの表示に対応し、スマートフォンでも見やすい構成。日々
の祈りに便利にご利用いただけます。

◆定価385円

HPIに配信サイトへのリンクや
試し読みがご覧いただけます



本のひろば.com

